様　式　Ｃ－１９、Ｆ－１９－１、Ｚ－１９　（共通）

科学研究費助成事業　　研究成果報告書

平成 ２９ 年　 ６ 月 １９ 日現在

機関番号：１２６０３
研究種目：基盤研究(B)（海外学術調査）
研究期間：2012～2015
課題番号：２４４０１０１０

研究課題名（和文）「イスラーム民主主義」をめぐる思想展開と実現可能性に関する研究

研究課題名（英文）Studies on the Development of Muslim thought of "Islamic Democracy" and its feasibility

研究代表者
飯塚　正人（IIZUKA, Masato）

東京外国語大学・アジア・アフリカ言語文化研究所・教授

研究者番号：９０２４２０７３

交付決定額（研究期間全体）：（直接経費）　　11,200,000円

研究成果の概要（和文）：2011年の「アラブの春」に始まる北アフリカ諸国の民主化過程では、イスラームの位置づけが最大の争点になると思われたことから、「イスラーム民主主義」の近現代思想史を精査する一方、今後の実現可能性に関する現地調査を行った。その結果、中東諸国における「イスラーム民主主義」の実現は、強権的な軍事政権（エジプト）やイスラーム法学者の政権（イラン）、国内政治における対立・分裂（リビア）に妨げられる一方、分裂・対立を回避する良識が働けば、世俗派への譲歩を余儀なくされるため（チュニジア）、現時点では極めて困難であることが明らかになった。また、予期せざる研究成果として、ISIL台頭の思想史的な位置づけも行った。

研究成果の概要（英文）：As legal status of Islam in national politics has been a focal point in the democratizing process of North African countries since the so-called "Arab Spring," this research has dealt with the history of "Islamic Democracy" thoughts, while conducting field researches of its feasibility. We found out that at present the establishment of Islamic Democracy is least probable. It is hindered by various elements; by a strong military power (in case of Egypt); by Islamic jurisprudents (in case of Iran); by lack of national unity (in case of Libya); compromise with secularist parties (in case of Tunisia). By chance, we tried to approach the rise of Daish (Islamic State) by placing its thoughts in historical and social currents.

研究分野：イスラーム学・中東地域研究

キーワード：イスラーム民主主義　アラブの春　チュニジア　イラン　エジプト　ISIL　Daish　イスラーム思想

１．研究開始当初の背景

1986 年に日本語訳が刊行されたエドワード・W・サイードの『イスラム報道』以来、イスラームと民主主義をテーマにした研究は特に欧米で散見されたものの、過去四半世紀の欧米とイスラーム世界の関係を反映してか、その大半が「イスラーム思想は民主主義と対立するかしないか」という論点をめぐるものに留まっていた。言い換えれば、19 世紀以降今日に至るまでムスリムの思想家たちが取り組んできた「イスラーム民主主義」創造の試みに着目した研究は極めて稀でしかなかったのである。現に「イスラーム民主主義」と見なし得る体制を採っているイラン政治に関する分析は国内外に多々存在するものの、イラン型「イスラーム民主主義」の思想的起源やそれが抱える問題点、またそれを改善しようとする思想的努力に関する研究となると、これまた空白に近い状況だったと言えるだろう。

Albert Hourani が 1962 年刊行の名著 *Arabic Thought in the Liberal Age 1798-1939* で明らかにしたように、スンナ派イスラーム思想史における「イスラーム民主主義」は 19 世紀後半のチュニスの宰相ハイルッ=ディーンによって発明された。彼は西欧諸国の繁栄の秘密を探る過程で、責任内閣制と議会こそ、正義と自由に基づく政治制度であると確信したが、これを導入するには、当時多くのムスリムが抱いていた「イスラーム法学者ではない俗人が議会を通じて「立法」することは、「神の法」とされるイスラーム法の施行を求めるイスラームの教えに反するのではないか」という疑念を払拭する必要があった。そこで彼は、議会の決定がイスラーム法に反さなければ、それはイスラーム法と見なし得る、法案がイスラーム法の諸原理に合致しているかどうかをイスラーム法学者が判断すればよいという、革命的な「イスラーム民主主義」思想を構築したのである。

けれども第二次世界大戦後、次々に独立を達成したムスリム諸国がこの思想を採用することはなく、非民主的な政権の長期支配が続くなかで、実現可能性の低い「イスラーム民主主義」に対する研究者の関心も薄れて行った。日本でも「イスラーム民主主義」は、小杉泰を除けば、本研究の代表者である飯塚がライフワークとして、分担者の山岸と協力しつつ研究してきた程度と言える（山岸・飯塚編『イスラーム世界がよくわかる Q&A100』〔1998〕、飯塚正人「現代エジプトにおける 2 つの「イスラーム国家」論」〔1993〕、『現代イスラーム思想の源流』〔2008〕などを参照）。

ところが、2011 年に到来したいわゆる「アラブの春」以後に進行するはずの民主化過程では、イスラームの位置づけが最大の課題・争点にならざるを得ないと誰もが予測した。そうなれば、そこで参照されるのは、ハイルッ=ディーンから今日に至るスンナ派思想家たちの営みと、イランの「イスラーム民主主義」に違いなく、それゆえ近現代における「イスラーム民主主義」をめぐる思想展開を精査し、今後それが実現する可能性を現地調査によって明らかにして行くことが喫緊の課題と考えられたのである。

２．研究の目的

すでに述べたとおり、スンナ派イスラーム思想史における「イスラーム民主主義」はチュニスの宰相ハイルッ=ディーンの手で発明されたが、彼以後の思想展開については小杉泰が断片的に扱っている程度で、体系的・本格的な研究は存在しない。今日、国際的に最も有名な思想家・イスラーム法学者となったユースフ・アルカラダーウィーにしても、「イスラームは民主主義を否定しないものの、イスラーム法上、確たる事柄については投票の余地がなく、投票できるのは、神が規定せず人間の自由裁量に委ねた外交・軍事・行政などのみである」といった主張が時に引用される程度で、彼がいかなる政治体制を構想しているのか等の問題については、まったくと言っていいほど解明されていない。よって、現代を中心に 19 世紀半ば以降のスンナ派イスラーム思想史における「イスラーム民主主義」の変遷の大きな流れを明らかにすることが本研究の一つの目的となった。

他方、「神の法」とされるイスラーム法の施行を当然視する声が以前から有力だった北アフリカ三国では、イスラーム抜きの民主化は考えられないものの、それがイラン型の「イスラーム民主主義」になるとは限らない。イラン型「イスラーム民主主義」は、ハイルッ=ディーンの発想同様、議会に提出された法案をイスラーム法学者が構成する「憲法擁護評議会」で審議し、イスラーム法の原則に反する法案が法律とならないよう、廃棄する権限を認めているが、北アフリカ三国をはじめとするアラブ諸国では、シーア派の法学者である「最高指導者」が立法・行政・司法の三権すべてに指導権を持つ「法学者の統治」が前提となっているイラン型イスラーム政治への警戒感が強いためである。このため、一方では現地のみならず、多くの移民が暮らす英仏両国でも新たな形の「イスラーム民主主義」を模索する思想上の努力が続くものと思われるし、主要な政治勢力の一部がイラン型の「イスラーム民主主義」に反対する過程で、イスラーム抜きの民主主義を追求する可能性もあった。現地調査では、こうしたいわば「当事者」の見解を聴取していくことで、いかなる「イスラーム民主主義」が実現する可能性が高いのかも明らかにしたいと考えた。さらにイラン型の「イスラーム民主主義」が確実に参照モデルとなることから、現に表面化しているイラン型「イスラーム民主主義」の問題点、またそれを改善しようとする思想的努力をも明らかにしようと試みた。

３．研究の方法

国内外で「イスラーム民主主義」思想に関する資料調査を行い、その思想展開・変遷を明らかにする一方、「アラブの春」で一定の民主化が見込まれたチュニジア、エジプト、リビアの三国で今後いかなる「イスラーム民主主義」が実現する可能性が高いのか、聴き取り調査を通じて明らかにする計画であった。しかしながら、リビアについては、研究期間を通じて政治的混乱が続いたため、現地調査を実施することができず、そのぶんチュニジア・エジプト両国での調査を強化した。

また、エジプト・チュニジア両国で新たな「イスラーム民主主義」を模索する思想家や、北アフリカ三国の世論と言論界に直接的な影響を与える西欧諸国在住のムスリム思想家、民主化活動家にも聴き取り調査を行った。さらに、北アフリカ三国にモデルとして参照されつつあったイランでも、隣接する湾岸アラブ諸国による評価を踏まえつつ、「イスラーム民主主義」体制下で表面化している問題やその改善を目指す思想の現状を調査した。

４．研究成果

いわゆる「アラブの春」で民主化を期待された北アフリカ三国のうち、リビアは 2014 年以降２つの政府、2016 年以降は３つの政府が併存する状況にあり、いまだに民主化後の国のかたちを議論する環境が整っていないばかりか、ISIL（いわゆる「イスラム国」）に一部地域を支配されるなど、治安上の理由から現地調査も実施できなかったため、同国における「イスラーム民主主義」思想やその実現可能性については特段の研究成果を挙げることができなかった。

一方、エジプトでは 2012 年に行われた大統領選挙で、「イスラーム民主主義」の最大の担い手と目されていたムスリム同胞団のムルスィー候補が当選。同年末に発効した新憲法は必ずしも「イスラーム民主主義」を志向してはいなかったものの、第４条(イスラーム法に関係する問題について、アズハルの上級法学者に相談すべきことを定めたもの)の運用のしかたによっては実質的にイラン型の「イスラーム民主主義」に代わる新たな「イスラーム民主主義」につながり得るものと評価できたため、その後の展開が期待された。

しかるに、ムルスィー大統領は 2013 年の軍事クーデタ（「6 月 30 日革命」）で失脚。ムスリム同胞団も「テロリスト」として軍事政権の厳しい弾圧を受けるなか、当初は「イスラーム民主主義」の賛同者と反対者の割合が拮抗していた国民世論も、「イスラーム民主主義」を実現するうえで不可欠のキープレーヤーとなるべきアズハル機構のイスラーム法学者に、ムスリム同胞団など、法学者以外のイスラーム運動に対する警戒感が強く、むしろ軍と協調して「イスラーム民主主義」と距離を置こうとする勢力が優勢であること、また 2014 年のシーシー大統領誕生以降は、軍と警察による体制批判者への弾圧と報道規制が著しくエスカレートしたことから、沈黙を余儀なくされている。つまりエジプトの場合、短期的には「イスラーム民主主義」どころか、「民主主義」の実現可能性もほぼ完全に消滅したと見なさざるを得ない。

このようにリビアとエジプトの「民主化」が遅々として進まないなか、チュニジアは民主化への確かな歩みを続け、2014 年１月には新憲法を制定した。この新憲法は、チュニジアが未来永劫"civil society"であると定めた第２条の存在により、一般にはイスラーム派に対する世俗派の勝利として報じられたものの、政教分離を定めたものではなく、イスラームを国教とし（第１条）、また国家を宗教の保護者と位置づける（第６条）など、「イスラーム民主主義」の１つのモデルとなり得る可能性を孕んでいる。

加えて、2014 年以来の ISIL 台頭を受け、欧米ではあらためて民主主義とイスラーム思想の関係が注目を集めており、論調の多くは「イスラーム民主主義」に否定的なものの、特にチュニジアについてはイスラーム与党ナフダの指導者であるラーシド・ガンヌースィーの民主主義と言論の自由をめぐる発言を高く評価して、「イスラーム民主主義」の実現を期待する声も少なくない。この点も含め、チュニジアはイランと同じく、「イスラーム民主主義」の１つのモデルとなり得る可能性をいまだに失っていないと見るべきだろう。

他方、イランではこの間、シーア派を目の仇にする ISIL が隣国イラクに進出し、眼前の脅威となったことで、民主的な選挙で選ばれた大統領と、国民が直接選ぶことのできない最高指導者との対立が顕在化することはなかったものの、対米関係の推移によっては、大統領派（中道派＋改革派）と最高指導者派（保守派）の権力抗争が激化する恐れがあり、最高指導者を国民が直接選ぶことのできないイラン型「イスラーム民主主義」と「民主主義」との間の深刻な齟齬を解消する手立てはいまだ見出されていないことが確認できた。

以上をまとめる形で、結論めいたことを言うとすれば、中東諸国における「イスラーム民主主義」の実現は、強権的な軍事政権（エジプト）やイスラーム法学者の政権（イラン）、また国内政治における対立・分裂（リビア）に妨げられる一方、分裂・対立を回避する良識が働けば、世俗派への譲歩を余儀なくされることから（チュニジア）、現時点では極めて困難と考えざるを得ない。とはいえ、長期的に見れば、多くの中東諸国でイスラーム抜きの民主化は想定しにくく、今後民主化が進展するに連れて、「イスラーム民主主義」は繰り返し注目を集める研究課題であり続けるだろう。

なお、本研究課題を構想・開始した時点で

は誰も予期しなかったことだが、「アラブの春」は結果として、「イスラーム民主主義」の対極にある ISIL を台頭させ、研究期間の後半は特に、彼らが世界の注目を浴び続けることになった。ISIL の台頭は、民主化が進むはずだった国々に負の影響を与え、「テロとの戦い」を大義名分に民主化そのものが阻害されるなど、「イスラーム民主主義」の実現を遠のかせる要因になったことから、本研究課題が目的を遂行するうえで大きな障害になったことは否めない。しかしながら、本研究課題のもう１つの目的であった近現代「イスラーム民主主義」思想史の精査は、なぜいま、世界の大半のムスリムから「あれはイスラームではない」と厳しく非難されている ISIL が、ほんの一部とはいえムスリムたちをこれほどまでに引きつけるのか、という問いに思想史の観点から答えるという予期せぬ機能を果たすことになった。

西欧流の政教分離に基づく国民国家の建設も、「イスラーム民主主義」に象徴されるような、時代にふさわしい新たなイスラームを産み出そうとする努力も、必ずしも成功しないなかで、人々は「イスラム原理主義」のわかりやすさに引きつけられていく。思想史的に見れば、ISIL はこうした流れの中で生まれた鬼子に他ならず、だからこそ根が深いと考えるべきだろう。このまったく予期しなかった研究成果は、期せずして内外における「テロとの戦い」をめぐる議論の前提となるべき知識や情報の提供に寄与したのみならず、「イスラム原理主義」研究にも一定の貢献をなしたものと考えられる。

５．主な発表論文等
（研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線）

〔雑誌論文〕（計 11 件）
① 飯塚正人、先行宗教・異教徒を取り込む「啓典の民」という考え方、週刊エコノミスト、査読無、5 月 2・9 日合併号、2017、p.94.
② 山岸智子、イラン　急成長する女子サッカー、アジ研ワールドトレンド、査読無、237 号、2015、pp.26-27.
③ 山岸智子、敵の敵の敵は…自分？、ふらんす、査読無、特別編集　パリ同時テロ事件を考える号、2015、pp.100-102.
④ 飯塚正人、「イスラム国」出現の背景――近現代イスラーム思想史から考える、世界平和研究、査読無、207 号、2015、pp.2-14.
⑤ 飯塚正人、「イスラム国」の蛮行と日本の今後（各自核論）『北海道新聞』、査読無、2015. 朝刊 9 面.
⑥ YAMAGISHI Tomoko、Book Review: Kamiyal Abedi, Montakhab Ai az Zhaponiyat-e Iranian dar Asr-e Tajaddod、いすみあ（明治大学大学院教養デザイン研究科紀要）、査読無、7 号, 2015、pp.77-81.
⑦ 山岸智子、カオスと仮想敵――「アラブの春」から 2 年半、公明グラフ、査読無、2013 秋号、2013、pp.28-30.
⑧ 飯塚正人、民主化とイスラーム――「アラブの春」がもたらした文明の岐路、現代宗教 2012、査読無、2012、pp.191-218.
⑨ 飯塚正人、「アラブ革命」再考――2011 年市民決起の真相、中東研究、査読無、514 号、2012、pp.14-20.
⑩ 山岸智子、イラン：石油利権国の制裁が市民生活圧迫、DAYS JAPAN、査読無、96 号、2012、pp.6-7.
⑪ 飯塚正人、啓典の民：アラブの春で議論となるキリスト教徒の地位、ASAHI 中東マガジン、査読無、2012.6.12 配信、2012
http://astand.asahi.com/magazine/middleeast/column/list.html?tagname=%E3%82%A4%E3%82%B9%E3%83%A9%E3%83%A0%E3%82%92%E8%AA%AD%E3%82%80

〔学会発表〕（計８件）
① YAMAGISHI Tomoko, Beyond the Dialectic of Globalisation Theories: Far East Visual Culture Entering Middle East, The International Union of Anthropological and Ethnological Sciences (IUAES) Conference of Commission of the Middle East, 2016.8.9, Krakow (Poland)
② 飯塚正人、アラブ諸国におけるイスラム主義運動の動向、日本イスラム協会公開講演会、2015.6.13、東京大学文学部（東京都）
③ 山岸智子、イスラームと女性アスリート：イラン女子サッカーを中心に、公開シンポジウム「イスラーム・女性・ジェンダー～価値の多様性とダイナミズム」、2015.3.28、明治大学駿河台キャンパス（東京都）
④ 飯塚正人、近代エジプトにおける「リベラル・イスラーム」の思想と限界、科研費基盤研究（A）「アラブ革命と中東政治の構造変容に関する基礎研究」主催シンポジウム「中東政治におけるリベラリズム再考―水谷周氏著『20 世紀エジプト思想におけるリベラリズム』刊行を機に」、2015.2.20、東京大学東洋文化研究所（東京都）
⑤ YAMAGISHI Tomoko, Introductory Note on the Panel "Iranian Networking in Transition", 10th Biennial Iranian Studies Conference, 2014.8.9, Montreal (Canada)
⑥ 飯塚正人、中東におけるムスリム同胞意識の変容と東南アジアへのまなざし、国立民族学博物館共同研究課題「「統制」と公共性の人類学的研究：ミャンマーにおけるモノ・情報・コミュニティ」研究会、2013.7.21、国立民族学博物館（大阪）
⑦ IIZUKA Masato, Standing at a crossroads？:Arab awakening 2011 and the Arab “Islamists” thought on the coexistence of Muslims and non-Muslims, 5th Meeting of the International Joint Research Project “Human Mobility and

Multi-Ethnic Coexistence in Middle Eastern Urban Societies”, 2013.2.2、東京外国語大学アジア・アフリカ言語文化研究所（東京）
⑧ 飯塚正人、「アラブの春」とイスラーム復興、東京大学大学院人文社会系研究科次世代人文学開発センター・イスラーム地域研究部門（NIHU プログラム・イスラーム地域研究東京大学拠点），東京外国語大学アジア・アフリカ言語文化研究所基幹研究「中東・イスラーム圏における人間移動と多元的社会編成」．科学研究費基盤研究（B）（海外）「「イスラーム民主主義」をめぐる思想展開と実現可能性に関する研究」，科学研究費基盤研究（B）「イラン人によるネットワーク型社会運動の系譜と、その政治化に際しての諸問題の検討」主催シンポジウム『「アラブの春」とイスラーム復興』、2012.10.8、明治大学駿河台キャンパス（東京）

〔図書〕（計１件）
① 長沢栄治・栗田禎子編、山岸智子ほか、大月書店、中東と日本の針路――「安保法制」がもたらすもの、2016、x+259p(pp.50-61)

〔その他〕
ホームページ等：なし

報道関連の主な活動
① 飯塚正人、『ホウドウキョク×Flag7』「中東７ヵ国がカタールと国交断絶　イランでは多発テロ」電話生解説、2017.6.12.
https://www.houdoukyoku.jp/
② 飯塚正人、SEKAI、「どうしてイスラーム教はわかりにくいの？　危険だと誤解を招く４つの理由　宗教学者・飯塚正人さん」インタビュー掲載、2017.5.31.
http://toshin-sekai.com/interview/17/
③ 飯塚正人、『池上彰のニュース　そうだったのか!!』「トランプ大統領、中東問題」パート監修、テレビ朝日、2017.2.11.
④ 飯塚正人、「墓碑銘　トランプ氏と渡り合う姿が見たかった　イラン、ラフサンジャニ氏の現実路線」インタビュー掲載、週刊新潮 1 月 26 日号、p.113、2017.1.19.
⑤ 飯塚正人、『池上彰のニュース　そうだったのか!!』「宗教」「独裁」パート監修、テレビ朝日、2016.10.9.
⑥ 飯塚正人、「「バングラデシュ」世俗派と原理主義の 45 年闘争史」インタビュー掲載、週刊新潮 7 月 14 日号、p.27、2016.7.7.
⑦ 飯塚正人、『池上彰のニュース　そうだったのか!!』「中東危機」パート監修、テレビ朝日、2016.1.29.
⑧ 飯塚正人、『荒川強啓デイ・キャッチ！』「サウジ・イラン断交」電話生解説、TBS ラジオ、2016.1.5.
⑨ 飯塚正人、「過激派の行為　誤解産む」インタビュー掲載、読売新聞、朝刊 9 面、2015.3.5.
⑩ 飯塚正人、『視点・論点』「拡散する「イスラム国」の脅威」録画出演、、NHK 総合、2015.2.11.
⑪ 飯塚正人、『ここがポイント!!　池上彰解説塾』「世界を驚かす独裁者＆独裁国家」パート監修、テレビ朝日、2014.11.3.
⑫ 飯塚正人、『ワールド Wave トゥナイト』「エジプト軍事クーデタ」スタジオ生出演、BS1、2013.7.11.
⑬ 飯塚正人、『そうだったのか！　池上彰の学べるニュース　年末スペシャル』「激動の中東情勢　「アラブの春」は今」パート監修、テレビ朝日、2012.12.28.
⑭ 飯塚正人、『いま世界は』「エジプト大統領選挙」録画解説出演、BS 朝日、2012.5.27.

主なアウトリーチ活動
① 飯塚正人、世田谷区ピースセミナー「現代イスラーム文化の源流」出講、2017.3.4、三茶しゃれなあど（東京都）
② 飯塚正人、特定非営利活動法人「難民を助ける会」研修会「イスラーム入門」講演、2016.9.4、難民を助ける会東京本部（東京都）
③ 飯塚正人、東京外国語大学海外事情研究所主催・高大連携事業『東京外国語大学夏期世界史セミナー――世界史の最前線Ⅷ』「イスラーム世界の歴史とイスラーム」講演、2016.7.27、東京外国語大学（東京都）
④ 飯塚正人、日本工業倶楽部素修会「「イスラム国」のイスラーム思想」講演、2016.7.25、日本工業倶楽部会館（東京都）
⑤ 飯塚正人、茨城県民大学講座『多極化世界の中のヨーロッパと中東～テロ・移民・難民問題を考える～』出講、2016.6.17、6.24、7.1、茨城県県西生涯学習センター（茨城県）
⑥ 飯塚正人、下越佐渡有道会「「イスラム原理主義とテロ／ジハードの論理」講演、2016.4.5、月岡温泉ホテル泉慶（新潟県）
⑦ 飯塚正人、府中市立中央図書館講演会「２時間でわかるイスラーム」出講、2015.12.13、府中市立中央図書館（東京都）
⑧ 飯塚正人、調布市北部公民館国際理解講座『なぜいま「イスラム国」なのか――中東情勢と近現代イスラーム（思想）史から考える』出講、2015.11.18、11.25、調布市北部公民館（東京都）
⑨ 飯塚正人、千葉県人権啓発指導者講座「イスラームとは何か」出講、2015.10.20、千葉県教育会館（千葉県）
⑩ 飯塚正人、東進ハイスクール「大学・学部研究会」講演（「イスラム教徒の考え方と思いを知るために」）、2015.8.5、TKP ガーデンシティ品川（東京都）
⑪ 飯塚正人、日本学術会議サイエンスカフェ「ISIL はイスラームではないのか――近現代イスラーム思想史から考える」講演、2015.7.24、文部科学省（東京都）
http://www/scj.go.jp/ja/event/pdf2/h-150724.pdf.
⑫ 飯塚正人、第 41 回栃木県オリエントセミ

ナー「「イスラム国」を産み出したもの－イラク戦争とシリア内戦」講演、2015.5.30、栃木県立美術館（栃木県）
⑬ 飯塚正人、（株）旭リサーチセンター主催国際問題研究会「イスラームの基礎知識」講演、2014.11.21、旭化成東京本社（東京都）
⑭ 飯塚正人、調布市北部公民館国際理解講座『今、もっと知りたいイスラム世界のこと』出講、2013.11.20、11.27、12.4、調布市北部公民館（東京都）

６．研究組織
(1)研究代表者
飯塚　正人（IIZUKA, Masato）
東京外国語大学・アジア・アフリカ言語文化研究所・教授
研究者番号：９０２４２０７３

(2)研究分担者
山岸　智子（YAMAGISHI, Tomoko）
明治大学・政治経済学部・教授
研究者番号：５０２７２４８０